衝撃のノン

続・悪魔の飽食

「関東軍細菌戦部隊」謎の戦後史

森村誠一

KOBUNSH

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

続・悪魔の飽食　「関東軍細菌戦部隊」謎の戦後史

昭和57年7月30日　初版1刷発行　**定価680円**

著者　森村誠一
発行者　大坪昌夫
印刷者　堀内俊一
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽2　振替 東京6-115347　株式会社 光文社　電話 東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（榎本製本）
表紙の模様・意匠登録　116613
© Seiiti Morimura 1982

ISBN 4-334-02477-7
Printed in Japan

衝撃のノンフィクション

続・悪魔の飽食

「関東軍細菌戦部隊」謎の戦後史

森村誠一

KAPPA NOVELS ドキュメント シリーズ

『続・悪魔の飽食――「関東軍細菌戦部隊」謎の戦後史』　目次

序　章　海を渡った細菌戦部隊……7
――ファシズムへの絶えざる疑惑と警戒を
▽海の彼方への追跡　▽民主主義の敵に対する警戒

第一章　日本帝国主義の崩壊と七三一の撤収……17
――1945年8月10日午前10時　平房（ピンファン）
▽悪魔の後始末　▽三つの陽動作戦　▽恐怖の性格　▽マルタの供給ルート
▽消毒して殺せ　▽地獄への道標　▽「丸太」の大脱走　▽人間蹂躙（じゅうりん）用処刑車
▽死へのナンバリング　▽悪魔のカメラアイ　▽歴史上最悪の日本人
▽毒ガスの出前　▽恐怖の兄弟部隊五一六　▽死の箱　▽三十七年目の通夜
▽生体ミイラ　▽最後の選択　▽死の河

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

作者からのメッセージ――中間の伝言板として……70
▽広がった波紋

第二章　悪魔の足跡を追って……75
――1981年12月2日午前10時　サンフランシスコ
▽ジョン・バウエルとの会談　▽レジスタンスのジャーナリスト
▽赤狩りの犠牲山羊（マッカーシズム　スケープゴート）　▽風船爆弾の正体　▽「ふ号」と「糧秣本廠（りょうまつ）1号」
▽細菌戦情報をめぐる米ソの確執　▽米国と石井の取引
▽国家安全保障上のエゴイズム　▽黒幕の構図　▽フェル・レポートの鍵（かぎ）
▽母国と祖国の谷間　▽科学的諜報部（ちょうほう）「ダナハン機関」　▽石井四郎の〝復活〟
▽谷間からの証言　▽母国への反攻日「Xデー」　▽地下に潜った七三一
▽七三一戦後本部　▽暗影を背負う部隊　▽悪魔の形見分け

第三章　〝幻の供述調書〟と細菌爆弾……123
――1981年12月12日午後2時　フォート・デトリック
▽細菌戦の郷里　▽開放された基地　▽よみがえった石井レポート
▽七三一細菌兵器のラインアップ　▽秘密書類「002」

▽〝細菌戦将軍〟の履歴書　▽悪魔の支隊　▽七三一の〝業態〟
▽石井式粘土製細菌爆弾　▽共食的血清　▽「猿」の正体
▽細菌スプレー爆弾　▽海軍細菌戦部隊の実態　▽細菌爆弾の青写真
▽悪魔部隊の研究メニュー総覧

第四章　世界を駈けめぐった新華社電……173
——1950年6月25日未明　朝鮮半島三十八度線
▽ラッテ・マウスの故郷村　▽朝鮮戦争への結節点

終　章　第七三一部隊と朝鮮戦争の関連……183
▽悪魔は復活するか　▽「悪魔の飽食」の手応え　▽動物拒否宣言
▽国論統一用の詭言　▽戦前、戦後の非自由は等質ではない
▽おとなと子どもの憲法解説　▽本末顚倒の改憲論
▽平和と民主主義の最後の砦　▽〝同志〟としての読者へ

資料1　「平房におけるBW活動」について……204
平房におけるBW活動

資料 2

「旧少年隊史」について……220
旧少年隊史
少年隊概要
房友会史

『続・悪魔の飽食』は、昭和57年1月24日より、25回にわたり「赤旗・日曜版」に連載されたものに、著者が加筆・再構成した作品です。

なお、本書掲載の写真、地図、図版の無断使用を固く禁じます。

（編集部）

序章　海を渡った細菌戦部隊

――ファシズムへの絶えざる疑惑と警戒を

海の彼方への追跡

私が、日刊「赤旗」紙上において「悪魔の飽食」――関東軍防疫給水部本部満州第七三一部隊の実録――連載を開始したのは、一九八一年七月十九日のことであった。連載は七十四回におよぶ長期のものとなり、一九八一年十月三日に終結した。

今はじめてこの実録について耳にする若い読者の方がたには、「関東軍」「満州」などの単語になじみがうすい方や、ピンとこない向きもあろう。改めてここに第七三一部隊をめぐる当時の状況についてふれておこう。

一九三一年（昭和六年）九月、日本軍部の謀略によって柳条溝（りゅうじょうこう）事件が勃発（ぼっぱつ）した。中国東北部・奉天（ホウテン）近郊の柳条溝で、当時日本が経営していた南満州鉄道（満鉄）の線路が、何者かの手によって爆破されたのである。奉天とは、現在の瀋陽（しんよう）を指す。

実は、爆破工作をおこなったのは当時中国東北部の占領をねらっていた関東軍参謀板垣征四郎大佐、石原莞爾中佐らの手の者であった。犯人は日本軍部だったのである。

だが、関東軍首脳は爆破事件を中国政府による日本への敵対行為であると強弁し、満鉄沿線から中国東北部全域に侵略戦争を拡大した。いわゆる満州事変である。

関東軍は一九三二年（昭和七年）初頭までに中国東北部の奉天・吉林・黒竜江三省を占領し、同年三月一日、満州国の成立を宣言し、傀儡政権をでっち上げた。

第七三一部隊――日本陸軍が極秘のうちにスタートさせた悪魔の細菌戦部隊は、満州国成立の翌一九三三年、中国東北部にそのまがまがしい姿を現わした。

当時浜江省の省都哈爾浜から南へ約二十キロの地点に平房という町があった。現在の黒竜江省平房区である。

関東軍は平房の一角に約六キロ四方の特別軍事地域を設定し、一年半の日時を費やして飛行場、鉄道引込線、発電所、常時八十人～百人を収容する監獄、大小多数の医学研究室と二千六百余人の隊員・家族が起居する宿舎群を建設した。

読者はこれら施設のうち監獄、医学研究室の存在に注目されたい。監獄と大小多数の医学研究室こそは、施設完成直後にここへ進駐した、第七三一部隊の

特殊な性格をしめすものであった。

関東軍はハルピン南方二十キロに建設した大規模な施設の中に、多くの中国人、ロシア人、朝鮮人、モンゴル人を捕虜として送りこんだ。

彼らの大半は、日本軍部の祖国侵略に抗して戦った中国八路軍の軍人、ハルピン市内で逮捕されたソ連赤軍将兵などであったが、中にはまったく無実のまま関東軍特務機関、同ハルピン憲兵隊本部によって捕えられた学生、労働者、市民も多数いた。若い婦人や一歳～十歳前後の子どももいた。少数ではあるが白人捕虜の姿もあった。

捕虜はマルタ（「丸太」）と呼ばれ、第七三一部隊がおこなう細菌戦研究・実験の生体材料となった。切りきざみ自由、加工自由の実験材料なので、個人名を持たない「丸太」というわけである。

石井四郎軍医中将を部隊長とする第七三一部隊には、多くの日本人医学者、研究者が軍属として配置されていた。

彼らは四つの部と二十余のプロジェクト・チーム（研究班）に勤務し、あらゆる種類の伝染病を研究した。ペスト、赤痢、脾脱疽、コレラ、チフス、結核、ライ病、梅毒、膣炎……当時「ロ号棟」と呼ばれた本部建物各階には大がかりな細菌製造工場が置かれ、寒天や培養液を使って多種多様な細菌培養が進められていた。

マルタはこうした細菌の感染実験に使用された。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第七三一部隊は、監獄に送りこまれてくるマルタを、二日に三体のペースで〝消費〟した。むごたらしい細菌戦実験の犠牲に供せられたマルタの数は、一九三九～四五年だけで三千人以上とみられている。

多数のマルタが生きながら解剖され、細菌感染の標本となった。七三一には天高くそそり立つ耐火煉瓦造りの性能優秀な焼却炉と煙突があり、煙突の先端からは、二十四時間中マルタを焼却する煙が絶えなかった。中には麻酔をかけられたまま炉に突っこまれるマルタもいた。

七三一における対ソ連、対中国、対アメリカの戦闘を想定した細菌戦の研究は、厳重な機密管理のもとに終戦の直前、一九四五年（昭和二十年）七月まで続けられた。

以上が、「悪魔の飽食」にまだ目をふれていない読者のための、第七三一部隊をめぐる概略説明である。――

『悪魔の飽食』は、一九八一年末に光文社からドキュメント・シリーズの一環として刊行された。連載中からかなりの反響が寄せられた実録ではあったが、書物になるや、さらに多くの電話、葉書、封書が筆者のもとに届いた。

投書の中に、元七三一関係者からのものが十数通あった。戦後三十七年の間、「七三一の秘密を背負って、ともに墓場へいこう」と誓い合い、固く口を閉ざしていた元隊員たちが、実録に触発され、さらに隠された七三一の真実を語りはじめたのである。

投書の中には、パートⅠ執筆中にはまったく予想すらしなかった恐怖の内容があった。「悪魔の飽食」の一部を完全に書き変えねばならないほどの衝撃の新事実である。

さらにこの間、私のよき分身（ベア）として実録完成に多大の労をつくしてくれた下里正樹氏は、私の指示の下に七三一の足跡を追ってアメリカに渡った。

渡米した下里正樹氏は、サンフランシスコ―シカゴ―ニューヨーク―ワシントン―ロサンゼルスと米国各地へ追跡の足をのばして、メリーランド州フレデリック市にある米陸軍フォート・デトリックを訪れた。

フォート・デトリックは、ごく最近まで米陸軍細菌戦研究所として知られていたところである。

下里氏は同基地のインテリジェンス・エージェンシー（情報部）を通して、おどろくべき公文書の存在を知った。

「フェル・レポート」あるいは「トムプソン・レポート」とも通称される英文タイプされた数冊の公文書がそれである。戦後、米国国防総省（ペンタゴン）に保管されてきた第七三一部隊関連書類である。

「TOP SECRET―COPY IS 1 OF 1 COPIES……DO NOT DESTROY」（最高機密、文書コピーはこの一通しかない。破棄すべからず）と表紙に朱書、あるいはスタンプが押され、また、黒インクで消された跡のあるこの公文書は、戦後一九四七年（昭和二十二年）に石井四郎、北野政次ら第七三一部隊首脳部

がGHQ取調官の前で供述した日本細菌戦部隊の諸技術と、供述するまでのGHQとの複雑なやり取りを記録したものである。

これまで米国のどこかにあると信じられていた石井四郎らの〝幻の供述調書〟がついに出現したのである。

「見つかった……見つかりましたよ！　七三一の極秘軍事資料です、これは！」

国際電話を通し、海を越えて渡ってくる下里氏の興奮した声を耳にしながら、私はその場で「続・悪魔の飽食」を書かねばならないと決意した。

下里氏はまたニューヨークの国連本部事務局を訪ね、人から人への紹介ルートをたどり、複数の日系米人と接触した。彼らはいずれも戦後に米軍軍属として日本に来た経歴を持っている。粘り強い追跡の末、下里氏は、米国東海岸のある町でU・Uと名乗る元GHQ＝G2セクションで通訳をしていた男を探し出した。

U・U氏は現在七十四歳であるが、日本語は流暢で、記憶は正確である。U・U氏は終戦直後の一九四五年十二月から一九四八年五月まで東京・八重洲のビルに寝泊まりしながら、すぐ近くの郵船ビルに勤務していた。

郵船ビルには、当時ウィロビー少将を頭とするG2（連合軍総司令部参謀第二部）の本拠が置かれていた。そこで多くの元日本軍将校と出会い、彼らとGHQ担当官の間に立っての通訳がU・U氏の仕事であった。元日本軍将校の中に、石井四郎軍医中将の姿があった。――

民主主義の敵に対する警戒

元七三一関係者からの投書にもとづく取材再開、下里氏が滞米中に入手した米陸軍細菌戦研究所の「フェル・レポート」「トムプソン・レポート」を軸にして、「続・悪魔の飽食」は書き進められることになる。

前作「悪魔の飽食」同様、本稿は森村誠一・下里正樹の一心同体の共同作業である。

文中、「私」の形を取り筆者の顔を出す場面があっても、それは一人の作家と一人のジャーナリストが二人三脚で疾走する合成体としての「私」である。取材から執筆まで、相異なる二つの才能が、共通の問題意識を触媒として化合合成した「私」であるとご理解いただきたい。

そして私たちの共通の問題意識とは、日本人が再び七三一の蛮行、愚行を繰り返すことがあってはならないというものである。

一部の労組幹部の間にすら軍備拡張、大量虐殺の核兵器容認が声高に叫ばれはじめた今、かつて日本人が産み出した世界最大の細菌戦部隊の、終戦による瓦解、戦後米軍との癒着による戦争犯罪の免罪、朝鮮戦争での再度の復権を克明に追うことは意義あることと信じる。

お国のため、国家利益のためという大義名分をパスポートにして自己を合理

化し、仮想敵を憎悪し、集団熱狂にとりつかれる中で、多くの平凡な市民がついには人間の生体解剖、大量虐殺という悪魔の行為を平然と犯していく。

七三一隊員らのたどった軌跡は、そのまま三十七年前に日本民族全体がたどった狂気の軌跡でもあり、現在の危険でもある。

われわれは何のために軍備拡張に執拗に反対しているのか。

それは太平洋戦争の犠牲によってかち取られた平和を無にしたくないからであり、憲法第九条の歯止めを失った場合の、軍備の際限のないエスカレートを予見できるからである。

ことは憲法九条を改定すれば足りるような単純な問題ではない。歴史上、侵略戦争のほとんどすべてが「祖国防衛」の名分のもとに進められた事実を忘れてはならない。

また、軍備は常に第一級であらねば意味がない。日本が世界第一級の軍備を持った場合、力は法となり民主主義は悪夢の再現によって踏みつぶされてしまうだろう。

憲法違反における軍備こそ、日本の軍備の特色である。憲法は、かつての関東軍がみずから法となって独断専行した軍隊の本質である侵略性を閉じこめる檻となるのである。

今、なぜ七三一なのか。それはようやく戦争を知らざる世代が、壮年期以下に達しつつある現在、改めて戦争の正体と軍隊の本質を凝視することによって、

平和と民主主義の脆さを再認識するためである。

平和と民主主義は、宙に浮いたグライダーのように、維持するためになんの努力もしなければ、自然に下降する〃自動的下降性向〃をもっている。それに反して、ファシズムは放っておけば、上昇して勢いを得る。

われわれは、現在の平和と民主主義を得るために無量の血を流した。それはファシズムに対する絶えざる疑惑と警戒によって、かろうじて維持されるものである。

平和と民主主義を失うのはたやすく、再びそれを得るためには無数の犠牲を積み重ね、長い暗黒に耐えなければならない。

七三一の軌道を追うことによって、かつての日本民族がたどった暗黒の深さを知り、民主主義を維持するための、礎の一石としたい。

「続・悪魔の飽食」は、三十七年前の一九四五年（昭和二十年）八月十日午前十時、ハルピン市南方二十キロ・平房の第七三一部隊施設からスタートする。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com